

AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学 図書館報

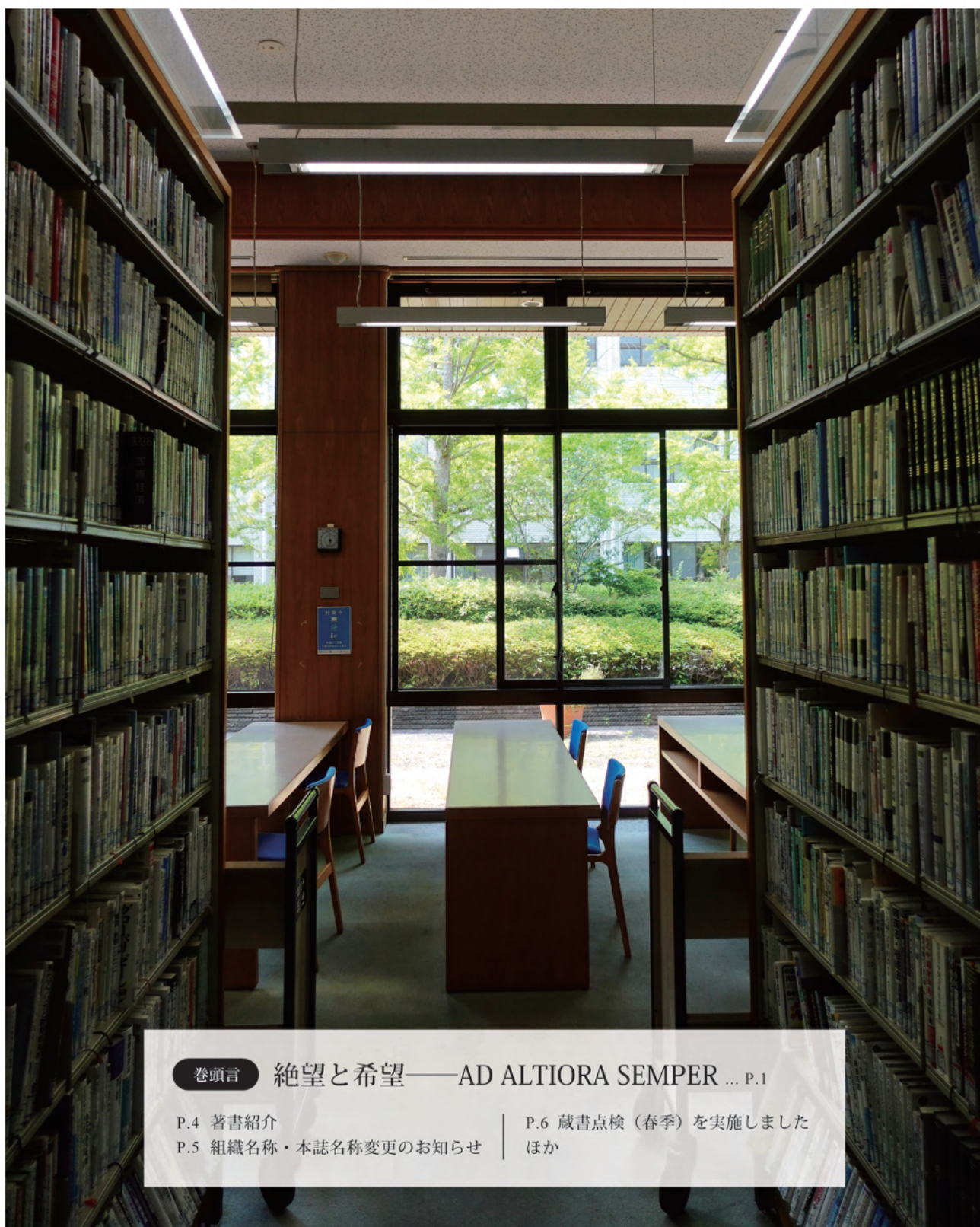
vol. **55**

2022年7月31日

【編集・発行】
神戸市外国語大学
図書館



AD ALTIORA SEMPER (アド・アルティオラ・センベル) とは
ラテン語で「常により高きを求めて」という意味です



巻頭言 絶望と希望——AD ALTIORA SEMPER ... P.1

P.4 著書紹介

P.5 組織名称・本誌名称変更のお知らせ

P.6 蔵書点検（春季）を実施しました
ほか

絶望と希望——AD ALTIORA SEMPER

ロシア学科 教授 金子 百合子

Человек такая простая и немудреная машина... Нет, доктор, в каждом из нас слишком много винтов, колёс и клапанов, чтобы мы могли судить друг о друге по первому впечатлению или по двум-трём признакам. (А. П. Чехов, Иванов)

人間というものは、そんなに簡単で、単純な機械でしょうか……。いや、ドクトル、人間ひとりひとりには、あんまりたくさん歯車やら、ねじやら、弁やらがつまっているので、第一印象やら、二、三の特徴やらで互いに判断できるようなものではありませんよ！
(チェーホフ、「イワーノフ」)

私に外大図書館報第 55 号の巻頭言の執筆依頼が来た時には、ロシア学科教員続きで良いものかとも思ったが、こうして声がかかったのは恐らくロシア・ウクライナ危機とそれに関連して「大騒ぎ」になったロシア学科の教員メッセージのこともあるだろうと、お引き受けすることにした。私の研究分野は現代ロシア語や露日対照言語学の、いわゆる「文法」であって、万人向けとは言い難い。言語を成り立たせている「文法」について語るとき、私は楽しく幸せな気持ちになる。本稿で取り上げる言語やことばの話は、その使い手が社会的動物であるところの人間であるために縛りつけられている根源的な真実と辛い現実の話である。2 月 24 日以降、私の周囲で起こった大小個々の出来事に対し、どう考えて良いのかわからないことも多く、私の思念や感情は混沌としている。全てが中途半端、こんな調子であるので本稿がまとまらないとしても、それはそのまま私の混乱ぶりを表していると、ご寛恕下さい。

ここ外大でゼロから学び始めたロシア語との付き合いは、既に私の人生の半分以上となり、私のアイデンティティの一部となっている。学生には楽しくロシア語を学んで欲しいと、コロナ禍前は授業で「カチューシャ」も歌っていた。学園戦隊アニメ(?)「ガールズ & パンツァー」(略してガルパン)の影響で学生からリクエストもされた。前線の兵士を想う乙女カチューシャの歌が独ソ戦の最中に広く歌われた歴史を考えると、現在、歌うことは憚られるし、女子高生が戦車に乗って戦うが、戦争ではなく死者も出ない、という非現実的で純粋にエンターテインメントのこのア

ニメも、当分は自粛されるのだろう。これらはその内容そのものが現在進行中の惨禍を思い起こさせずにはおかない。だが、国家や争いとは無関係の、全く無色であった記号でさえも、突如として、社会において新しい意味・解釈を獲得し、声高に主張するようになった。ロシア軍が自国の軍事車両に用いた「Z」の識別記号が、ロシア政府とその「特殊作戦」の支持を意味するようになった。JR 恵比寿駅のロシア語案内標記に「不快だ」という声が複数あったことで JR 社員が標記を隠す出来事があったことも記憶に新しい。北海道にあるロシア語の道路標識は「問題だ」と「つぶやいた」政治家もいた。

なぜ、「坊主憎けりや袈裟まで…」のような反応が起こるのだろうか。それは過剰な反応だろうか。それとも自然な反応だろうか。恵比寿の場合も、北海道の場合も、大きな批判が起こり、当事者が元に戻したり、削除したりしたことを考えると、日本社会の「声」はこれらの言動を行き過ぎた反応と受け止めたようである。だが、日本でもこのような言動が当然とみなされていた時代があった。「正露丸」は日露戦争時に「征露丸」と名付けられたものが後に国際関係上の配慮から漢字を変更したものである²。太平洋戦争中は英語を敵語として追放した³。飲食店の名前やタバコの銘柄に欧米風の名前をつけることが公的に禁止され、「鉛筆から敵性語の撃滅だ！」と、トンボ鉛筆の HB は「中庸」に、H は「1 硬」に、B は「1 軟」になった。欧米風というだけで改名さえさせられた「須田博」を知っているだろうか⁴。そして現代、ロシア語の案内標識への苦情を批判した日本社会の「声」はこのような過去の歴史か

1 アントン・チェーホフ(1988)『イワーノフ』『チェーホフ全集第 11 巻』(松下裕訳、筑摩書房、pp.79-208.

2 大幸薬品「正露丸あれこれ話」<https://www.seirogan.co.jp/products/seirogan/various/history.html>(2022/06/01 閲覧)

3 大石五雄(2007)『英語を禁止せよ：知られざる戦時下の日本とアメリカ』、ごま書房。

4 ナターシャ・スタルーヒン(1986)『ロシアから来たエース—三百勝投手スタルーヒンのもう一つの戦い』、PHP 研究所。

ら日本人が学んだ喜びしき成果であろうか。

ところで、恵比寿駅のニュースを伝える情報番組で、ある若いコメンテーターが、いろいろな言語で情報提供しなくとも、日本語と英語だけで十分なのではないか、と述べていて、思わず耳を疑った。日本語は日本語を解す人のため、英語は日本語を解さない全ての人のため。「日本にいるのだから日本語を学んで／話して当たり前」「日本語が出来ないのならせめて英語くらいは知っとけよ」？日本人の英語力の低さを棚に上げて、英語以外の言語を話す人々には英語くらいは知っているべき、とでも言うのであろうか。外国語を学ぶことがどれほど大変かはご存じの通り。現実として社会には「強い言語」と「弱い言語」があり、時としてそれは、「有益な言語」と「無益な言語」と評される。そして「強い言語」の話者はわざわざコストをかけて外国語を学ぶ必要もない。これが事実であることは、多言語主義を推進する欧州連合(EU)において定期的に調査が行われるユーロバロメタ『欧州人と諸言語』(名称は調査年によって多少異なる)の結果を見れば一目瞭然だ。英語が公用語のイギリスやアイルランドの外国語習得率は低い(アイルランドにはアイルランド語があるが、16世紀以降のイングランドによる植民地政策の結果、アイルランド語話者は減少)。

言語は、ナショナリズムを適用していく上で欠くことのできない構成要素として機能する。為政者にとって言語は政治の道具である。今回の紛争の原因のひとつにはウクライナ語とロシア語という言語の問題もあった。一国の独立・統一の証しとして唯一の「国語」を制定するというプロセスは歴史上至るところに見られる。ハンガリー人であるアゴタ・クリストフの自伝(原文はフランス語)に、「最初のうち、言語[ことば、とルビ]は一つしかなかった」で始まる「母語と敵語」という一節がある⁵。子供の頃から、占領国が変わる度に、彼女は異なる「敵語」を学習するよう強制され、母語の使用は制限された。21歳の時、彼女は家族でスイスに亡命するが、そこでは、自らの意志で、フランス語を習得するための、長きに亘る“闘い”を始めることになる。その結果、「この言語が、わたしのなかの母語をじわじわと殺しつつあるという事実」を前に、「フランス語もまた、敵語」とアゴタは言う。足元を見よう。日本での国語制定の流れは日清戦争によるナショナリズムの高揚が背景にあり、日清、日露、太平洋戦争を通して、日本政府は統一された国語・日本語を使い、植民地化した台湾や韓国、南洋諸島、東南アジアの人々の同化政策を進めた。国外だけではない。国内でも、明治政府はアイヌと彼らの言語を迫害した。屈辱的な名称の「北海道旧土人保護法」(1898年制定)では日本語使用の義務、日本風氏名への改名がうたわれた。この

法律が廃止されてからまだ30年も経っていない。アイヌの国会議員萱野茂は国会でアイヌ語で発言した⁶が、このようにアイヌ語を話せる話者は現在の日本にどれくらいいるであろうか。4月4日、研究棟のエレベーターのディスプレイに「沖縄県誕生の日」と映し出された。1879年のこの日、琉球処分により、琉球王国は崩壊し沖縄県になった。それとともに、琉球語という1つの言語は日本語の方言に位置づけられることになったが、ユネスコの世界危機言語地図(2009年)によれば、アイヌ語や沖縄語、他6言語が日本で消滅の危機にある。言語と方言の区別は、言語学的なものではなく、政治的、地政学的なものであることが多い。「沖縄方言」とは逆に、旧ユーゴスラヴィアではいくつかの地域変種(方言)を持つ「1つの言語(セルビア・クロアチア語/クロアチア・セルビア語)」とみなされていたものが、ユーゴ紛争の結果、4つの個別言語(セルビア語、クロアチア語、ボスニア語、モンテネグロ語)に分裂した。

このように、ひとたび戦争が始まると直接の当事者は、敵対する民族との言語や文化の共有を望まない。そして言葉は自らのアイデンティティと結びついて人々の感情を激しく揺さぶることになる。迫害され積み重なった恨み辛みは、冷静になれ、と言われたって「綺麗事」である。『ヴェニス商人』で、ユダヤ人であるが故にアントーニオに散々酷い目にあわされてきたシャイロックは次のように言う⁷。「ただ積みもった恨みと、どうにもアントーニオが嫌でたまらないというそれだけで、このように自分が損をする訴訟を起こすのです」。頭ではわかっているが心が拒否する、それが人間の本質であれば、私たちは心が傷ついた当事者に自分たちの「正論」を押し付けること、感情的にならずに理性的になれ、とは言えない。今回の紛争においても、これまでロシア語を自由に使っていたウクライナ人がロシア語の使用を自らの意思でやめることに対して、非当事者が「言語には罪が無い」という「正論」を突き付けることは非情である。そう考えると、ロシア語の案内標識の扱いに日本社会で起こった批判は、戦争当事者ではない「他人事」であるが故の、理性の声であることを自覚すべきであろう。「自分事」になった時に私たちはこうも理性的でいられるかどうか。

戦争は国家間で起こる。「国」とは何か。大正デモクラシーの立役者となった政治学者の吉野作造とその弟で国家官僚を経て大臣になった信次を主人公に据えた、井上ひさしの戯曲「兄おとうと」に次のような場面がある⁸。作造は、中国から訪ねてきた袁世凱の娘に、国民党と共和党が共闘して中国が一つになれるだろうか、と尋ねられこう答える。「国もおにぎりと同じ

5 アゴタ・クリストフ(2006)『文盲：アゴタ・クリストフ自伝』(堀茂樹訳)、白水社。

6 萱野茂「参議院会議録情報 第131回国会 内閣委員会」第7号 平成六年十一月二十四日(木曜日)
<http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/sangiin/131/1020/13111241020007c.html>(2022/06/01 閲覧)

7 ウィリアム・シェイクスピア(2005)『新訳ヴェニス商人』(河合祥一郎訳)、角川文庫。

8 井上ひさし(2010)「兄おとうと」『井上ひさし全芝居その6』,新潮社。pp.461-537。

る。なにを芯にして一つになるのか、そこが大切なんだよ」。そこに在る皆が、国をまとめる「芯」として「民族」「ことば」「宗教」「文化」「歴史」と順に挙げるが、作造はいずれにも否と答える。さて、作造の答えは？

「兄おとうと」はユーモラスでテンポよく堅苦しくない作品であるが、考えさせられる場面やセリフが沢山ある。例えば、国の「芯」候補を次々と論破する兄に屁理屈だ、非国民だ、と言う信次に、作造は「屁理屈とか、非国民とか、そんな中身の無いことばで議論を封じ込めようとするのは卑劣な行為だぞ」と窘める。さらに、兄の思想は危険だ、大逆罪だ、とその場を立ち去ろうとする弟に対して、「ここは学問の府、どんな議論も許されるはずだ」と作造は学問と言論の自由を説く。今回の紛争にあっても、聞く耳持たずの頭ごなしに「フェイク」「プロパガンダ」「論点のすり替え」といった単純明快な一言が、両陣営で、飛び交う。これらの情報操作や論法が確実に存在する一方で、その根拠を確認せずに「知ったかぶり」が出来る耳に心地良いこれらの言葉を安易に使ってはいないだろうか。何が「真」で何が「偽」なのか、今回の紛争に関して、自分もいろいろと調べようとしたが、それは容易いことではない。私はあまりにも無知であり、事は非常に複雑に絡み合っていた。そして目の前の現実の悲惨さは過ぎ去った過去の悲惨さにリアルさと印象の強さで勝る。

国の芯は何か、と問われた作造の答えは、人々が「ここでともに生活しようという意志」を持ち、「ここでともによりよい生活をめざそうという願い」を持つことであった。民族でも、言語でも、文化でもなく、同じ社会の一員である、ありたいという共通の思いが国のものになる。そこでは、個人の多様性、すなわち個々人の置かれた環境に由来する多様な視点は、共生社会をより魅力的に発展させ繁栄させる宝になる。社会における言語の多様性に関して言えば、アゴタは、スイスで生まれフランス語話者として育つ子供とのコミュニケーションの問題についても書いている。親が子供の言葉を理解できない、子供が親の言葉を理解できない。世代間のコミュニケーションの破綻は、親子の関係性を損なう、家族としてのヒストリーが断絶する。言語が自己表現の手段であり、どれほど自分のアイデンティティと結びついているか、自分のことのように共感出来れば、同じ社会に住む外国語話者に日本語話

者になるよう「同化」を迫るのではなく、彼らの言語権も尊重するべきであろう。日本において継承語教育は緒についたばかりである。バイリンガルが羨ましい、なんて呑気な話ではない。だが、実際、移民や外国人のための言語サービスはコスパで決まるのが現実だ。外大の私たちに何か出来ることは無いだろうか。

指定された文字数ははるかにオーバーしているが、どうにもまとめられない。2月24日以降、失望と絶望からなる高密度のブラックホールに吸い込まれた、そこからまだ抜け出せていない。直接の当事者ではない私であっても、だ。それでも、やっぱり傷ついた心が救われたのは、人と人との直接のコミュニケーションのおかげであったりする。私はこの件が起こってから友人や外大の同僚の先生方と沢山話した。また、ロシア学科のメッセージが縁で様々な分野の人と知り合い、同窓生や教え子らともまた繋がり、実際に再会もした。人と人が会って直接話すことによる心の通い合い、共有する場の空気のリアリティは、コロナ禍で様々な便利な情報通信デバイスの恩恵を受けたが、やはり代え難いものである。こうして心が癒された、という確かな自分の経験から、ことばを通して得られる人間への信頼を諦めたくないと思う。ギリシア神話のかの有名な「パンドラの箱」—全ての厄災が出た後の最後に残っていたのが「希望」だったという美しい伝説。どうも、これは後世の人間による都合の良い解釈が広まったものであるようだ。だが、その事実こそ、時間と空間を超えた人類の集合的無意識があることを信じたい。どんなに悲惨な現実と直面したとしても、人間には未来への希望が残されている、と信じたい。そして、どんなに「綺麗事」に聞こえたとしても、理想は高く掲げ、少しでも、その高さを求めていくこと、届かぬと高みを仰ぐのではなく、求めて行動していくことが、私たちがこの世に生きていくということなのだと思いたい。言語を知ることは、その言語を話す人や社会、文化や多様な価値観と直接つながることであり、言葉と言葉を交わすことは、人と人、社会と社会、異なる価値観を結んでいく大きな力になるはずと信じたい。それは外国語だけではなく、母語についても同様のこと。思っていること、感じていることを、一方的につぶやくのではなく、是非、周囲の人と身の回りで起こっていることを率直に話し合ってみて欲しい。

■ 文中紹介作品【本文掲載順】(図書館所蔵)

- 「イワーノフ」『チェーホフ全集第11巻』(請求記号：N080=29=17-5-11)
- 『文盲：アゴタ・クリストフ自伝』(請求記号：N950.28==68)
- 『新訳ヴェニス商人』(請求記号：N932.5=699=4)
- 『英語を禁止せよ：知られざる戦時下の日本とアメリカ』(請求記号：N830.7==335)

翻訳がつないでくれた世界

総合文化教授
並河 葉子 (なみかわ ようこ)

『イギリス帝国史： 移民・ジェンダー・ 植民地へのまなざしから』

フィリッパ・レヴァイン著
並河葉子、森本真美、水谷智訳
昭和堂、2021.7発行

図書館所蔵：N233.06==151



本書は、フィリッパ・レヴァインの著書の翻訳である。

著者のフィリッパとは並河がケンブリッジでの在外研究中の2007年、同じ時期に別のカレッジに滞在していた彼女のセミナーに参加したことがきっかけで交流が始まった。もっとも、この本を翻訳することになったのは、帰国後、学生時代からの研究仲間であり、子育て仲間でもある森本と、育児と仕事に忙殺される中でも何か研究にかかわることを形にできないかと、いろいろ考えたのが発端である。翻訳ならば、仕事、育児、家事でまとまった研究時間をとることが難しい日常のなかでもできるのではと、当時イギリス帝国史の刺激的な研究を相次いで世に出していた彼女の最新刊の訳出を決めた。

最初にちゃんと中を読んでから始めればよいのだけれど、実は取り掛かる前には二人ともろくに内容を読んでいなかった。翻訳なのであっさり進むかと思ったら甘かった。フィリッパの、まるでイギリス人に語りかけるかのような英語を、日本の読者にとって内容が正確に伝わり、そして読みやすい日本語にするのに難儀した。おまけに通常の歴史の本とは違って、必ずしも時系列に沿って章立てがされていないし、イギリス帝国史というタイトルなのに本国の話はさっぱり出てこない。それでも、以前から植民地やジェンダー、子どもなど、帝国史では周縁的なテーマに注目して研究を続けていた翻訳チームにとってこの仕事は学ぶことが多かった。

森本と並河は長年研究チームを組んでいる。それぞれの強みが違うところがこのコンビが長続きしている秘訣だろう。この仕事もこと

ばのセンスが抜群でイギリス本国の青少年に詳しい森本と、西インドやアフリカなど植民地の家族を研究対象とする並河、そしてインドの専門家水谷という三人であったからこそ完成できたのだと思う。そして、わたしたちの研究はいつも日本の今とは違う時代、地域に暮らしていた普通の人たちの「生」を明らかにするというのがテーマである。本書も為政者たちの英雄的な行為ではなく、圧倒的多数の庶民たちの日常の暮らしやそれと隣り合わせの暴力、人びとの哀しみ、不条理についての記述が多い。これは21世紀の今、まさに私たちが日々目にしながら、無力感を覚えるものと変わらない。「すべての歴史は現代史である」というフレーズが実感できる内容である。

翻訳作業が長きにわたったため、始めたころはまだ小学生だった子どもたちはすっかり大人になってしまった。当時は仕事や研究を続けることができるのかに頭を悩ませていた森本・並河は、相変わらず古い文献をあさりながら議論を重ね、いまは介護について話す日々である。この翻訳作業をとおして、私たちは細々とはあっても、なんとか研究につながり続けることができた。そして、人の成長や老いに伴走しながら仕事をし、生きることについても考えさせられた。本書は私たちにとって内容以上に大切な意味を持っている。

原著はすでに第三版まで出ており、新しい帝国史研究の代表作といってもよいだろう。そうした本を日本に紹介できた幸運に感謝している。ぜひ多くの方に読んでいただきたい。

組織名称・本誌名称 変更のお知らせ

2022年4月1日、組織名称を以下のように変更しました。

旧：神戸市外国語大学学術情報センター
新：神戸市外国語大学図書館

これに伴って、今号より、本誌の名称を以下のようにあらためます。

AD ALTIORA SEMPER 神戸市外国語大学図書館報

「AD ALTIORA SEMPER」の部分は変わりません。ラテン語で「常により高きを目指して」の意味をもつこのタイトルのように、今後もより良い誌面づくりを目指します。引き続き、どうぞご愛読ください。

あたらしい蔵書検索システムで こんなことができます！

2022年1月の図書館システム更新に伴い、蔵書検索システム(OPAC)がとても便利になっています。

/// こんなことができます ///

- ▶ CiNii、NDL サーチ、リポジトリ等の検索が、簡単な操作でできます。
- ▶ スマートフォンやタブレット端末でも、パソコンと同じ操作で使えます。
- ▶ 予約・期限延長等が GAIDAI PASS と同じアカウントでできます。*
- ▶ 雑誌の最新号の検索ができます。
- ▶ ILL 申込や購入希望申込ができます。*
- ▶ 検索項目が簡単に選べます。また、一度設定した検索条件を保存できます。* ※ログインが必要です

展示資料のリストや、おすすめ図書も表示されるようになりました。より効率的に資料を探しせるようになった蔵書検索システムを、ぜひご活用ください。

ブックログ「神戸市外国語大学 図書館の本棚から」をご紹介します

2015年7月、現在は500回目を超える司書のおすすめ資料を、図書館のホームページ掲載だけでなく、広く一般の方にも見ていただこうと、ブックログの運用を開始しました。

司書のおすすめは、2006年12月1日にWeb連載が始まりました(画像右上)。類似の事例として、愛知県立大学図書館の「今月の5冊」は2007年7月から始まったようですが、大学図書館の職員がWeb上で資料の紹介を長く行っているのは珍しいようです。

コロナ禍には特別編として在宅学習サポートや図書館利用の連載を経て、2021年10月から資料の紹介を再開し、2022年7月現在は第532回を迎えています。

ブックログはweb上に仮想の本棚を作成し、感想やレビューを共有するサービスです。図書館のホームページTOPにも、仮想本棚のサムネイルを掲載しています(画像右下)。気になる表紙があれば、ぜひクリックしてみてください。

英語で論文を書き始める前に

1	英語	MLA handbook for writers of research papers 6th ed. [N836.5=43]
2	日本語	MLA英語論文の季刊 第6号 [N836.5=41]
3	英語	The Chicago manual of style 15th ed. [N836.5=44]
4	英語	APA publication manual 5th ed. [N140.7=37]
5	日本語	APA論文作成マニュアル [N140.7=38]

図書館では論文を書くための参考書を多数所蔵していますが、その中から、英語論文を書く際に文体・書式のガイドとされる代表的なものを3冊をご紹介します。これらは、参照することで、句読法など英語で書くための基本的なことから、引用の仕方、挿入としての体裁の整え方まで分かるようになっていきます。紙を離れることは、学術情報を取り巻く環境の変化にあわせて内容が更新されており、最新のものはインターネットのサイトやオンラインジャーナルからの引用方法なども掲載されています。

1はMLA(=Modern Language Association)刊行。文学・人文科学分野でもっともポピュラーなものです。2はシカゴ大学出版局(The University of Chicago Press)刊行。歴史や人文科学分野でも多く利用されます。現在まで、翻訳されたものは刊行されていません。3はAPA(=American Psychological Association)刊行。心理学・社会科学などの分野で利用されます。

2006/12/1(編)

Facebook

Twitter

図書館のおすすめ資料 Booklog

蔵書点検（春季）を実施しました



（※）点検件数内訳

閲覧室	： 89,125 冊
書庫 1 階	： 23,731 冊
書庫 2 階	： 43,861 冊
合計	： 156,717 冊

2022年3月23日から31日まで春季の蔵書点検を実施しました。
蔵書点検とは、図書館で所蔵している図書があるべき場所に収められているかどうかを確認し、行方不明のものがいないか点検する作業のことをいいます。すべての書架を順に見ていくのですが、もれなく確認するには棚の中で図書が移動しないようにしておく必要があります。このため、図書の貸出・返却をストップし、作業にかかる期間を閉館としています。作業時期は、図書館利用への影響を出来る限りおさえるために、利用の少ない長期休業期間(夏季・春季)を選んでいきます。

今回は、合計 156,717 冊(※)の図書を点検しました。2021 年度夏季は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、図書館職員のみで実施しましたが、春季は学生アルバイトの皆さんにお手伝いいただき、予定より多くの資料を点検することができました。

つなぐれ読書のバトン

『エラリー・クイーン創作の秘密…
往復書簡 1947-1950 年』

エラリー・クイーン 著

従兄弟同士の合作ユニットである作家エラリー・クイーン。往復書簡により明らかになる、ダネイトリーの激しい議論やライバル心。こだわりを主張し、重箱の隅を突き合う2人の様子は、傍からみると呆れて笑ってしまうほどの身に覚えのある1冊。

ある親近感を感じる。魂を削って作品を作り出す作家には申し訳無いが、事実とはどんな物語よりも面白い。本書に出てくる作品を先に読むと面白さ倍増です。全ての芸術が生まれる過程を知りたくな

第四走者 S F

「つなぐれ読書のバトン」投稿募集!

200字以内であなたのお気に入りの本を紹介してください。メールで氏名またはペンネーム・紹介資料書名・著者名を明記し、下記の宛先まで。学生、教員、職員など利用区分に関係なくどなたでもご応募いただけます。

応募先

library@office.
kobe-cufs.ac.jp

注意事項

- 氏名またはペンネームを掲載させていただきます。
- 外大図書館に所蔵がないものも応募できます。
- 漫画・雑誌等をご遠慮ください。

図書館日誌 《 2022年1月～2022年6月 》

2022 年	1.5	図書館システム更新による新システム稼働
	3.23-3.31	蔵書点検
	4.1	「学術情報センター」の名称が「図書館」に変更
	4.6-5.31	新生歓迎企画「図書館クイズラリー 2022」実施
	4.21	JLP オリエンテーション
	5.25	図書館職員オンラインイベント「レポート・論文のための資料探しのコツ 図書編」開催
	6.8	図書館職員オンラインイベント「レポート・論文のための資料探しのコツ 雑誌論文編」開催
	6.8	トライやるウィーク (1校2名受入)
	6.22	LA オンラインイベント「レポート相談会」開催

	AD ALTIORA SEMPER vol.55 神戸市外国語大学図書館報 第55号
ISSN	0919-2336
編集・発行	神戸市外国語大学図書館
	〒651-2187 神戸市西区学園東町9丁目1
	TEL : 078-794-8151 / FAX : 078-797-2257
	URL : http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/
発行日	2022年7月31日
発行責任者	図書館長 芝 勝徳